

みんなづくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

参加型開発の問題性と地域住民の多様性：
干潟の住民参加型保全における「地域住民の知識」：
沖縄島・羽地内海沿岸の集落を事例として

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-05-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 池口, 明子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00000987

第1章 干潟の住民参加型保全における 「地域住民の知識」

沖縄島・羽地内海沿岸の集落を事例として

池口 明子

横浜国立大学教育人間科学部

本稿では、近年の開発論における住民の参加型保全批判の論点を整理し、干潟を利用する地域住民の生態知識の記述方法とその課題を検討した。参加型保全の問題として、①地域住民あるいは地域住民の知識は多様であるにも関わらず、特定の知識が地域の代表として取り扱われること、②地域の労働観のなかで、環境利用に関わる労働が周辺化されている場合、その公的な参加が望めないことなどがあげられる。ここで事例として取り上げる沖縄島羽地内海は、沖縄島沿岸で最大級の砂泥干潟をもち、それはかつて稲作を支えた沖積地に連続している。稲作を主生業とした集落では、潮間帯の上部から下部までのゾーンのうち、特に潮間帯上部・中部に棲む貝類を様々な用途で利用してきた。この集落では、農地整備後の赤土流出以前の生態系で、とりわけ変化が著しかったゾーンに関する知識が蓄積されており、住民参加型の自然再生にとって重要な知識である。一方、稲作をはじめとする農業労働に対してその知識は周辺化されやすい側面も持っている。これらの側面は、低地農業との連続性が強く、底生生物相が多様な熱帯・亜熱帯の干潟では特に留意するべきである。

- | | |
|------------------|-------------------|
| 1. はじめに | 3.2 羽地内海の干潟環境と利用 |
| 2. 参加型開発への批判 | 4. 干潟利用の労働観と仕事の変化 |
| 3. 沖縄島羽地内海の干潟利用 | 5. 自然知識の動態と参加型保全 |
| 3.1 羽地内海沿岸の集落と漁業 | |

キーワード：参加型開発，ローカルな知識，労働の周辺化，干潟，沖縄島

1. はじめに

青い海と白い砂浜，サンゴ礁。「沖縄の海」のイメージといえは多くの人々が抱くのはこれらの景観であろう。沖縄島に河口の泥干潟があることは、稲作がおこなわれていたことと同様に、一般にイメージされない事実である。筆者がここ10年ほど訪れている沖縄島北部に位置する羽地内海（図1）は、沖縄本島・本部半島・屋我地島に囲まれた穏やかな内湾浅海で、丘陵地から流れ込む河川の河口から前浜にかけて、広く干潟がみられる。これらの干潟は、本土復帰とともに始まる農地整備事業の影響による赤土流出で大きく変わったものの、依然として多様で希少性の高い生物種の生息場であり、豊かな漁場ともなっている。筆者は、友人の生物学者からこれらの生物

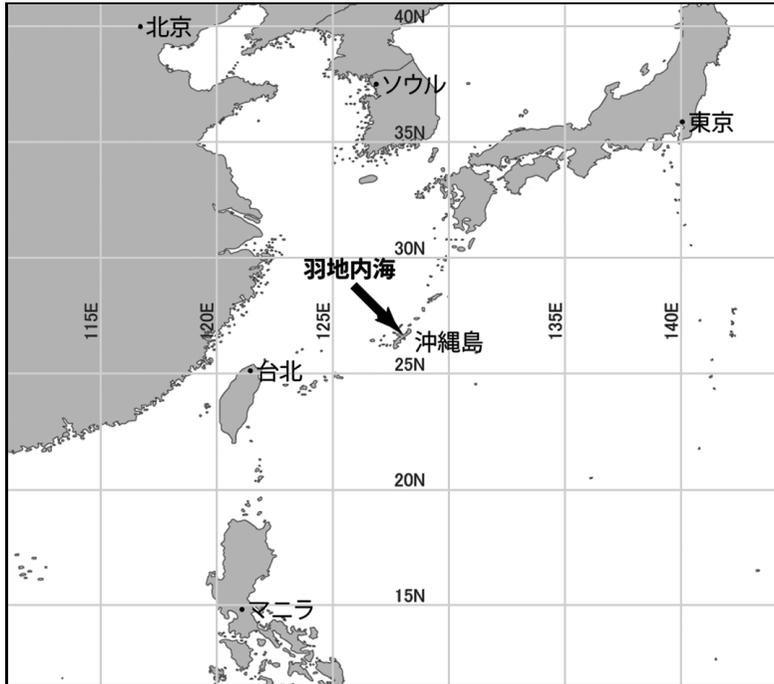


図1 羽地内海の位置

の固有性や、さまざまな利用の仕方を聞いて興味を持ち、10年ほど前に沿岸の集落を訪ねるようになった。少しずつ家を訪ねては干潟の貝やカニの利用について話を聞き、時には干潟と一緒に採集するなかで、干潟の生物生態に関する人々の知識を知るようになったが、訪ねた人々のなかには、そうした知識について話すことを恥ずかしがり、拒む人も少なからずいた。こうした人々には、何度も訪問するうちだんだんと口を開くようになった人々もいたが、そうやって調査をしているうちに、採集の場である干潟は護岸工事によって変わっていった。沖縄県の他地域をみても、多くの干潟は埋め立てや護岸工事のほか、「自然再生」事業の一環としての養浜などによって急速に変化している。これらの事業は、地域の人々を無視して進行しているわけではない。地区の公民館からは住民に計画の知らせが回覧され、意見がある人にはヒアリングへの参加の機会が与えられている。この事例地域のみならず、日本の沿岸における近年の環境保全や開発においては、政策過程への地域住民の参加がますます重要視されつつある。国や自治体、あるいは企業主導の「トップダウン」型開発に比べて、参加型開発は地域住民がもつ知識を生かし、地域住民の利益を中心に据えた管理を可能にするものとして期待されている。しかし、それらの政策に期待される「知識」と、私が集落で聞きとりをした「知識」はいかにも遠く離れたもののように思える。「地域住民のもつ知識」はこれまでいかに議論され、これからどのように捉えればよいのだろう

か。本稿では、参加型開発や保全で注目される「地域住民の知識」を念頭に置きつつ、干潟の生物資源利用に関わる知識と、それが置かれている状況について考えてみたい。

近年、参加型開発の可能性や方法については、さまざまな学問分野において批判がなされ、議論すべき課題が提示されつつある。本稿ではそれらのうち、1990年代から現在までの自然資源管理論における「参加型」アプローチの批判をいくつか取り上げて、住民の資源利用とその知識をめぐる問題を整理する。さらに、沖縄島北部の干潟とその沿岸集落を事例として、地域住民による生物資源利用とその知識を考察する。ここでとくに考えてみたいのは、干潟の生物資源利用者がもつ知識が置かれた状況を場所との関係から考えることの意義である。最後に5節では、本事例で示された方法論と他地域への適用可能性について考察する。

2. 参加型開発への批判

いわゆる途上国を中心とした農山漁村の開発論では、1980年代にトップダウン型開発の限界に対する指摘がなされ、開発実践への地域住民の参加が提唱されてきた(チェンバース 1995)。この参加型開発の主な目的は、社会経済的に不利な立場にある人々を開発の意志決定に参加させることで住民を力づけ、開発主体として正統化し、地域住民の合意による持続的な開発を進めることにある。こうしたアプローチは開発の現場に取り込まれ、国連機関や世界銀行などのドナーによって重要視されるようになった。Thompson (1995) は、行政主導から参加型開発への政策変化の背景として、次の4つの点を挙げている。第一に、多くの国々の行政部門が抱える財政問題であり、NGO との協働によって財政負担を軽減することが推奨されている。第二に、世界銀行やIMFなどの国際機関から、森林や湿地の管理に参加型政策を導入するよう要請がある。第三に、行政主導の政策が失敗しやすいという認識である。この失敗とはたとえば、行政組織と地域住民との間の紛争などが挙げられる。そして第四に、地域住民主体の自然資源管理の成功例が報告されるようになったことである。これらの要因のうち、第一、第二に挙げた動向は、とりわけ西欧諸国における新自由主義的な「小さな政府」への批判とともに認識されるようになり、参加型開発への慎重論や、理念・手法への批判的検討へと発展していった。

Cooke and Kothari (2001) による“Participation: A New Tyranny?” は、それらのなかでもまとめた批判的論集として知られる¹⁾。本書の冒頭では、1980年以降、主流となってきた参加型開発がいくつかの点で問題を抱えているとの指摘がなされている。

第一の問題は、参加型政策が「参加」という名目をもつことによって、実際にはトップダウンな意志決定プロセスを正当化してしまう問題である。たとえば、Mosse (2001)

はインドのアグロフォレストリーにおける樹種の選択を事例として取り上げ、実際には多様な樹木が利用されているにも関わらず、実際に「地域のニーズ」としてほぼ単一の樹種（ユーカリ）が選択されたことを挙げている。ここでは地域住民の「ローカルな知識」を生かすとしながらも、参加型政策に利用されうる「知識」はあらかじめ設定されている。村人の側でも、行政側の意図に応じて自らの知識の正当性を主張することがあり、結果として行政と住民が共同で、ある特定のニーズを権威化する（McKinnon 2006）。事業の実施期間は通常限られており、そのなかで、こうした行政と特定の住民の「協働」は「効率的」である。地域住民のニーズを丹念に探ろうとするプロジェクトスタッフは、村人からも行政からも「要領が悪い」と思われてしまう。

第二に、こうした問題の根本にあるのは、「地域住民」あるいは「地域住民がもつ知識」の捉え方に関する問題である。参加型開発では、政策担当者が参加すべき「地域住民」を均質な集団とみなす傾向があり、そのために意志決定に用いられた知識が地域を代表しているかのようにみなされる。実際には、地域には異なるアイデンティティをもつ人々が生活し、地域の様々な生物資源を異なる方法で利用している。これらの関わりを単一な利用や知識に代表させることで、集団内部の力関係が無視されたり、力を持たない人々がより不利な立場になったりすることがある。たとえば、地域住民が組織する委員会が森林伐採地区を設定する。その委員会のメンバーには女性が限られており、なおかつ薪炭を使えないことで困窮するような家族は入っていない（Hildyard et al. 2001）。自然資源管理を目的とした参加型開発では、行政側があらかじめ設定した自然の状態を達成することが優先され、周辺化された人々の参加のプロセスが問われないことが多い（Agrawal and Gupta 2005; Twyman 2000）。そもそもチェンバースは、「住民参加」の重要な意義として、それまで発言権がなかった声なき人々を、自らの生活の場の将来を決定する主体とすることによって状況を変える力をもたせることを掲げていた。参加は、このエンパワーメントの手段であったはずだが、現在の参加型開発では、参加それ自体が目的化したり、「参加」という名目で知識や労働の「提供」者として住民が利用されたりすることもある（Hildyard et al. 2001）。こうした傾向を生み出す一つの大きな要因が、コミュニティ内部の差異と、それがもつ力関係の理解の不足である。

この点をとくに強く指摘するのは、ジェンダーの視点からの批判である。欧米主導の開発プロジェクトの多くは、女性の立場への配慮をいわば義務化しているが、調査が機械的で、その地域に形成されているジェンダー関係の把握が不十分なことが多い。このなかでとくに顕著なのは女性をまとめて一つの均質な集団ととらえる傾向である。女性のなかにも当然ではあるが、資源利用の形態や資源の価値観において差異があり、これを無視した資源管理や開発は、異なる集団間の対立を招くこともある（Guijt and Shah 1998; Cleaver 1999）。ジェンダーの視点によるコミュニティ内部の多

様性の記述は、単に男女の差異や力関係を強調するのではなく、性を含めて人々が当然視しがちな様々な属性にもとづく資源利用モデルや価値観の差異、その地域的文脈を明らかにすることを目的とするべきである (Cornwall 1998)。

Agrawal and Gibson (1999) は、開発論におけるコミュニティの「神聖化」の背景の一つに、共有資源論におけるコミュニティの「再発見」を挙げている。Berkes (1989) や McCay and Acheson (1987) らによる共有資源論は、コミュニティによる共有資源管理を再評価し、ハーディンの「共有地の悲劇」論に代表される初期の資源管理論における、コミュニティへの悲観的な見方を批判した。世界銀行などの国際機関による資源管理策の失敗や、修正主義による「伝統的社会」の再考などもあいまって、コミュニティを自然破壊的なものとする論調に再考が促された。その一方で、あまりにも楽観的にコミュニティを善とする風潮も生まれ、コミュニティ内部の階層性や資源利用との多様な関わりの批判的な検討は立ち遅れてきたという。なお、沿岸資源に関する共有資源論では、日本の漁業協同組合の資源管理に関する事例研究が頻繁に引用されてきたが、これらの日本の事例研究にも、コミュニティ内部の差異やジェンダーへの関心がみられないとする指摘もある (Davis and Bailey 1996: 259)。

第三の問題は、自然資源に関する「ローカルな知識」の記述の問題である。Mosse (1994) は、参加型開発プロジェクトにおける知識の収集が、「公的な」行事としておこなわれるため、「私的な」活動を通しておこなわれる知識が除外されがちであると指摘する。「私的な」活動とは、自家消費目的や遊びのための資源利用などが含まれるであろう。「私的な」活動を通じて蓄積された知識は、「公的」な場所で公開するに値しないという感覚は、住民だけではなく、研究者や政策担当者も共通してもつことがある感覚である。沿岸環境のうち、とくに埋め立てや護岸などによる改変が激しく、保全の必要が叫ばれる干潟や磯の資源は、こうした小規模な活動を通じて利用され、知識が蓄積されている。これらの生態系の保全に「ローカルな知識」が重要であるとされているにも関わらず、公的な議論の場には登場しにくい側面をもっているために、結果として政策から排除される可能性は大きい。

以上のような批判は、主に国際機関による「低開発国」を対象とした開発プロジェクトや、開発論に向けられた批判である。特に批判の対象とされる PRA (Participatory Rural Appraisal) の手法は、短期間の調査・開発を目的としてマニュアル化された手法であり、それへの批判はそのまま日本の沿岸開発にあてはまるものではない。しかし、日本の沿岸保全や自然再生事業においても住民参加は重視されつつあり、その背景は Thompson (1995) が指摘したいくつかの社会的背景と重なる。一方で「地域住民の知識」の捉え方や記述の方法についてはこれまで議論が少なく、上記の批判は議論の土台として有用であると考えられる。上記の論点を前提として、以下では沖縄島北部の羽地内海を事例に、干潟利用に関わる「地域住民の知識」の認識と記述の方法を提

案し、その可能性と限界について考察したい。

3. 沖縄島羽地内海の干潟利用

3.1 羽地内海沿岸の集落と漁業

羽地内海は、沖縄島北部の本部半島と屋我地島に囲まれた面積約 20 km² の浅海である (図 2)。最深部は水道部で 27 m、内海は平均水深 8 m である。最大干潮時に干出する干潟が海域の約 3 分の 2 を占める。内海には沖縄島の脊梁山地を水源とする羽地大川をはじめとして、いくつかの河川が流れ込み、河口に干潟やマングローブを形成している。羽地内海に面した集落は、内海の漁港がある仲尾次、その北の真喜屋、屋我地島の屋我、饒平名、我部、本部半島側の湧川、呉我、仲尾の計 8 つである。このうち湧川は現在の今帰仁村、そのほかは名護市に属している。名護市にある 7 つの集落は、近世には羽地間切、1908 年の特別町村制施行後には羽地村に属しており、戦後に屋我地島の集落が屋我地村として独立し、1970 年に名護市に合併されてからは、それぞれ名護市羽地地区、屋我地地区と呼ばれている。

内海に流れ込む河川で最大の羽地大川は、大正初期から 1938 年にかけての改修により現在の位置に付け替えられるまで、本部半島と沖縄島との間に沖積低地を形成した²⁾。この沖積低地は、「羽地ターブクァ (田袋=田圃)」と呼ばれる羽地間切の一大稲作地であり、この地域を含む羽地間切は沖縄島で最も水田の割合が多い稲作地帯であった。近世には、薩摩藩への仕上世米、首里王府に献上する貢米の主要な産地とされ、サトウキビやウコンの作付は制限されていた。沿岸集落の人々は、低地に貢租米を作り、背後の丘陵地の畑で自給用のサツマイモや大豆を育てた。羽地大川の中上流部では薪炭生産も主要な収入源であり、藍なども生産されて仕上世米とともに輸出された³⁾。沿岸集落のうち、仲尾次、饒平名、湧川、仲尾は渡し船の発着地であり、とくに本部半島と沖縄島の交差地にある仲尾次や仲尾は、商業地としても発展した⁴⁾。

1904 年になると、羽地村から海外への移民が開始され、ハワイ、アメリカ合衆国などの北米大陸、バルー、ブラジルなどの南米大陸、フィリピンなど東南アジアなどが主な出稼ぎ地となった。1935 年には羽地村の海外在留者率は 28.9% におよび、沖縄県下で首位の移民母村となった。そのおもなきっかけは、地割制度の廃止と土地の私有化により、土地の譲渡による渡航費の捻出が可能になったこととされる (石川 1997: 429-464)。しかし、零細な農家が多いこの地では、二男以下は作男として借金をして地主の家に住み込むことも多く、その返済も主要な動機であった (小川 1975)。恐慌時には、奄美大島や沖縄島南部のようにソテツなどの救荒食を口にしたという農家は比較的少ないものの、困窮して海外に渡ったと言う人々もいる。

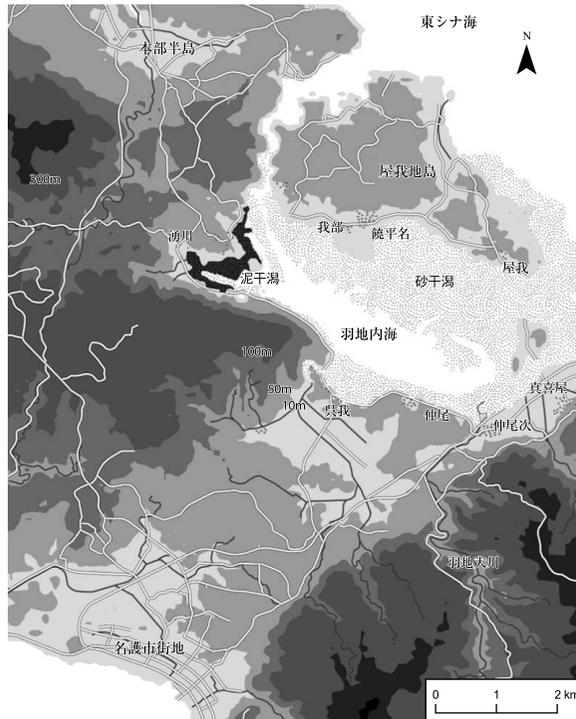


図2 羽地干潟

戦後の昭和30年頃からは、パイナップルやサトウキビの栽培が積極的に導入されるようになり、その拡大を目的とした農地整備が導入されていく。1961年に、台湾農業の視察から帰った農業協同組合長の提案をきっかけに、1967年に2万ドルの助成を受け、日本への返還後1972年から羽地・屋我地地区で最初の農業基盤整備事業が屋我地島で始まった。1986年に完工したこの事業は、農道の建設と農地統合、山林の伐採を含み、総面積281ヘクタール、屋我地島の総面積の約半分に及ぶ。事業前に989アールあった水田は事業後に完全に消失し、畑地面積は775アールから2057アールに拡大され、農業の機械化がすすんだ⁵⁾。その一方、干潟には事業によって侵食された赤土の堆積がすすんだ。本部半島で同様に、呉我の背後の丘陵地で農業基盤整備がおこなわれ、干潟に赤土の堆積がみられるようになった。

「海洋民」の地として知られる糸満とは異なり、出荷用の米と自給用のサツマイモ栽培が主な生業であったこの地域では、漁業はもっぱら自給用におこなわれてきた。小型の地引網（やんだー）や、河口のえり漁（ばじゃー、はじゃー）、投網などにより魚を獲り、干潮の夜には松明をたいて浅瀬や干潟を歩き、カニやタコなどを採る「いざい」などの漁法が一般的であった。アユやウナギ魚など河川での漁もさかんであり、アユ養殖は漁業組合設立後の最初の事業であった。一方、仲尾次など羽地地区のいく

つかの集落は糸満漁業への労働力を送りだし、この少年らがのちに帰郷して商業漁業を始めることになる（坂下 2001）。

商業用の海面利用として当初重要であったのは塩田である。羽地村で入浜式製塩がおこなわれるようになったのは明治 13 年前後といわれ、明治後期には屋我地島沿岸や湧川、仲尾などの干潟に入浜式の塩田が分布し、那覇や中城湾とならぶ沖縄島の主要な製塩地となっていた（名護博物館 2000）。中城湾で近代的な製塩が始まる昭和 30 年頃までは、販売用に製造されており、現在でも塩田を囲む石垣の跡が残っている。

仲尾次漁港を拠点とした商業漁業は、戦後糸満への出稼ぎから帰ってきた人や、県外や海外から戻った人々によって始められたとされる。この時期、仲尾次や仲尾ではイリコ製造のためのナマコ採集がおこなわれるようになった。昭和 21 年には、仲尾次に羽地漁業協同組合（以下、「羽地漁協」とする）が作られ、遠洋漁業船の建造もなされたが、台風の被害などで休止し、現在では船外機付き小型漁船による沿岸漁業と養殖が主体となっている。2002 年の組合員数は 106 人であり、うち 80 人（75.4%）が屋我地・羽地地区の居住者である。なかでも仲尾次居住者が 22 人と最も多く、次いで屋我地島の外海に面した済井出居住者が多い（15 人）。これ以外の集落では組合員は 1～7 人と少ない（池口 2005）。

以上のように、羽地内海沿岸の集落は、農業や林業を主な生業としてきた期間が長く、商業目的の漁船漁業が活発化したのは戦後であり、漁協も設立されてから日は浅い。集落の人々は主として自給用の漁業を通して、羽地内海とかかわりを持ってきたといえる。

3.2 羽地内海の干潟環境と利用

3.2.1 干潟環境の特徴と変化

ここではまず、羽地内海の海域環境のうち、干潟の環境についてやや詳しく述べる。現在の羽地内海の干潟は、大きく分けて河口干潟と前浜干潟に分けられる。河口干潟は羽地大川、奈佐田川（我部祖河川）、真喜屋大川、かーそーがーの河口に形成され、底質は細かな泥で、奈佐田川以外ではマングローブを伴っている。前浜干潟は屋我地島の屋我から我部にかけて広く分布し、沖出し最大約 1km の砂質の干潟がある。この饒平名干潟を詳しくみると、岸から沖に向かって異なる干出時間や底質、生物相により、大きく 4 つのゾーンに分けることができる（表 1）。最も岸寄りのゾーン I は、小潮の日でも干潮時には干出する潮間帯の最上部のゾーンで、陸から運ばれた泥に、海岸の岩が侵食されて崩れた礫が分布している。陸水の影響を最も受けやすいこのゾーンには、汽水の砂泥質を好むウミナナ類が多く生息する。礫の間にはサザエと同じリュウテンサザエ科のカングクや、カキ類が付着している。マングローブでは大型のシジミ類であるマングローブシジミも数は少ないが生息している。ゾーン II は、砂

表1 漁場区分

ゾーン	潮間帯における位置	底質の特徴	採集活動期
I	潮上部～上部	泥、礫	小潮～中潮（周年）
II	上部～中部	泥～砂	中潮（周年）
III	中部～下部	砂	大潮（周年）
IV	礁原～下部	礫、岩盤	大潮（春・冬）

(筆者の観察による)

質の干潟であり、周年中潮の干潮に干出する。ここでは小型の二枚貝であるアラスジケマンガイやヤエヤマスダレ、スダレハマグリなどが多くみられる。ゾーンⅢは、Ⅱと同様に砂質であるが、やや下部に位置し、毎月の大潮の干潮時に干出する。ゾーンⅡと同様の貝類のほか、これよりやや大型のパカガイ科のリユウキュウアリソやリユウキュウザルガイ、ハボウキなどもみられる。ゾーンⅣは最も沖側、湾中央部に位置するゾーンで、砂の堆積は薄く、大型の礫や岩盤が主体で、一年で最も潮が引く春と冬の大潮時に干出する。岩盤や大型の礫に付着するウミギクなどがみられる。干潟の貝類資源を利用する人々は、季節や潮の周期に応じて、これらのゾーンを行き来している。

羽地内海の干潟では170種以上の貝類や、190種以上の野鳥が観察されており⁶⁾、県内でも有数な生物多様性の高い湿地とされている⁷⁾。しかし、この豊かな生物相も、前述した農地整備事業の影響を受けて大きく変化してきた。農地整備以前には地形に沿って細分された耕地が水田や畑として利用され、低地の水田は降雨時には海への土砂流出を防ぐ役割を持っていた。耕地拡大と農道整備を目的として傾斜地を大きく減少させる農地整備によって、干潟に急速に赤土が堆積していった。現在赤土が堆積している場所を50cmほど掘ると、藻場に特徴的な貝類であるニッコウガイが、サンゴ起源の砂とともに大量に埋まっている。現在でも数は少ないものの、赤土の堆積がやや薄い場所では、ニッコウガイやリユウキュウサルボウなどの藻場の貝類が生息している。農業整備事業前の屋我地島の前浜干潟は、サンゴ起源の砂質にアマモ類などの海草が繁茂する環境であった。河口干潟は農業基盤整備前も陸起源の泥が卓越していたが、赤土の堆積によりやや粒度が大きい底質がみられるようになった。こうした底質の変化に護岸施設の建設も加わり、植生や貝類などの生物相も変化している。特に岸に近い場所では、海草場に特徴的なニッコウガイなどの貝類が激減し、砂や礫を好むヤエヤマスダレなどの貝類の割合が大きくなった。こうした変化を受けつつ、かろうじて残存しているのが現在の生物相であるといえる。

3.2.2 漁船漁業による漁場利用

羽地内海では仲尾次漁港に事務所を置く羽地漁協に所属する漁船によって、周年漁

業がおこなわれており、干潟も直接的・間接的に利用されている。羽地漁協が管理する漁業権は、区画漁業権と共同漁業権の2種類である。共同漁業権は名護漁協との共同で管理している。羽地内海の区画漁業権漁場は水道部に魚類養殖区画が、湾中、湾奥部に貝類と魚類の養殖区画が設定されており、水道部でスギとマダイの養殖がおこなわれている。2006年からは、屋我地島の干潟でヒトエグサの試験的な養殖も始まった。主な漁船漁業の漁業種は、刺し網、小型定置網、延縄、カニカゴ漁、潜水、一本釣りである。最も従事者が多い刺し網と小型定置網の場合、夏季には外海の礁斜面や礁池で操業可能であるが、風が強くなる冬季には内海での操業が多くなる。

漁船漁業による対象魚種と漁場は、仕切り書の分析によってある程度明らかになる(池口 2005)。年間を通して、内海で安定的に水揚げされるのはコノシロ科のドロクイとリュウキュウドロクイで、これらは満潮時の干潟や河口で摂餌する。夏季には、内海でのキスやタイワンガザミ、コチなどの魚種の水揚げが多くなる。次いで内海を利用するのは潜水漁業で、操業は夏季である。採集対象となるのは主にハネジナマコと貝類(ウミギク)であり、前者は5~8mの浅い砂泥質の海底、後者は内海で干潟に連続する礁斜面が主な漁場となる。ここにあげた内海の漁業では、直接干潟を利用することは少ないが、対象とする魚種の多くは、干潟を生息域の一部とする生物である。

3.2.3 自給用採集活動による漁場利用

羽地内海沿岸の集落では、漁船漁業よりもむしろ、自給用の採集活動の場として干潟が一般に利用されてきた。日中に最も潮が引く4月から6月の間の大潮に干潟に行くと、多くの採集者に会い、採集された貝類をみることができる。しかし、集落のどのような人々が参加し、それぞれにどのような利用の特性があるのかを知るためには、選択した集落のうちなるべく多くの人々から情報を得る必要がある。筆者が調査対象としたのは、屋我地島の屋我、饒平名、我部集落、および本部半島の呉我集落である。とりわけ屋我と饒平名に関しては、自給用の採集活動を活発におこなってきた65歳以上の高齢世帯を抽出し、不在世帯を除く全戸を訪問した。このうち、許可を得た世帯において聞き取り調査をおこなった。訪問時には、筆者が屋我地島の干潟で採集した49種類の貝の標本を持参して、1つずつを一緒に見ながら、方名、採集方法、生息場の様子、採集したころの年齢や時季などを尋ね、可能な場合には併せて子供のころから現在までの採集活動とその変化、採集以外の活動との兼ね合いについて尋ねた。なお、49種類の貝類は、各ゾーンの代表的な貝類のうち、手で採集可能な大きさがあるものを選択した。以下では屋我と饒平名における聞き取り結果について述べる。

表2は、屋我と饒平名で聞き取りをした世帯における、貝類の利用方法を示したものである。聞き取りをおこなった49種類のうち、25種類の貝類について利用経験の回答があった。採集された貝類やその用途は、一方で貝類の形態や生息域の特性など

表2 貝類の利用と販売

生息地と出現頻度				貝類の種名		用途													
						饅平名							屋我						
I	II	III	IV	和名	学名	A	B	C	D	E	F	G	A	B	C	D	E	F	G
1	1			イボウミニナ	<i>Batillaria zonalis</i>														
1		1		マクガイ	<i>Isognomon ephippium</i>														
1				カンギク	<i>Turbo (Lunella) coronatus</i>														
1				マガキ	<i>Crasostrea gigas</i>														
2			2	カリガネエガイ	<i>Barbatia virescens</i>														
2				ヒルギシジミ	<i>Polymesoda erosa</i>														
2				オキナワイシダタミ	<i>Monodonta labio</i>														
2				ウミニナ	<i>Batillaria multiformis</i>														
3			3	ケイトウガイ	<i>Chama dunkeri</i>														
3				マスオガイ	<i>Psammotaea elongata</i>														
4				オキシジミ	<i>Cyclina sinensis</i>														
4				ハナグモリ	<i>Glauconome chinensis</i>														
	1			アラスジケマンガイ	<i>Gafrarium tumidum</i>														
	1			カニノテムシロ	<i>Pharcularia bellula</i>														
	1			シマベッコウバイ	<i>Japeuthria cingulata</i>														
	1			ホウシュノタマガイ	<i>Natica gualteriana</i>														
	1			ヤエヤマスダレ	<i>Katelysia hiantina</i>														
	1			スダレハマグリ	<i>Katelysia japonica</i>														
	2	2		ヒメリユウキュウアサリ	<i>Tapes belcheri</i>														
	2	2		ユキガイ	<i>Meropesta nicobarica</i>														
	2	2		イオウハマグリ	<i>Pitar sulfureum</i>														
	2	2		リュウキュウマスオ	<i>Asaphis violascens</i>														
	3	3		リュウキュウアリソ	<i>Mactra grandis</i>														
	3	3		ヒメアサリ	<i>Ruditapes variegatus</i>														
	3			ホソスジヒバリ	<i>Modiolus philippinarum</i>														
	3	3		リュウキュウザルガイ	<i>Regozara flavum</i>														
	3			サメザラモドキ	<i>Semele carnicolor</i>														
	3	3		ハボウキ	<i>Pinna bicolor</i>														
	3	3		コツツガイ	<i>Eufistulana grandis</i>														
	3			カミブスマ	<i>Clementia papyracea</i>														
	4			リュウキュウサルボウ	<i>Anadara antiquata</i>														
	4			カワラガイ	<i>Fragum unedo</i>														
	4			リュウキュウアサリ	<i>Tapes literatus</i>														
	4			ニッコウガイ	<i>Tellinella virgata</i>														
	4			スリガハマ	<i>Tapes platyptychus</i>														
		1		ワニガキ	<i>Dendostrea folium</i>														
		2		ハナビラダカラ	<i>Cypraea (Erosaria) annulus</i>														
		2		ウミギク	<i>Spondylus barbatus</i>														
		2		イトマキボラ	<i>Pleuroploca trapezium</i>														
		3		シロザル	<i>Chama brassica</i>														
		4		オオスノメ	<i>Periglypta clathrata</i>														
		4		アコヤガイ	<i>Pinctada martensii</i>														
		4		リュウキュウオウギ	<i>Comptopallium radula</i>														
		4		リュウキュウマテガイ	<i>Solen sloanii</i>														
		4		ズングリアゲマキ	<i>Azorinus coarctatus</i>														
		4		イシワリマクラ	<i>Modiolus vagina</i>														
		4		オオズングリアゲマキ	<i>Azorinus scheepmakeri</i>														
		4		ユウカゲハマグリ	<i>Pitar citrinus</i>														
		4		カモジガイ	<i>Lutraria arcuata</i>														

生息地：I～IVは表1中のゾーンに対応

出現頻度 1：多い 2：ふつう 3：少ない 4：稀

用途 A：おやつ B：おかず C：みそ汁 D：行事食 E：薬 F：玩具 G：販売

の側面に、他方で集落や世帯ごとに異なる生業のあり方に影響を受けている。ここでは前者の側面に着目しつつ、生息域ごとに利用をみてみたい。

まず、小潮でも周年採集可能な潮間帯上部（ゾーンⅠ）では、カキ類とマングローブシジミを除いては、イボウミニナ・ウミニナやカンギクなどの小さな巻貝が多い。このゾーンに多く生息するウミニナ類は、殻長が2～3cmほどの小さな巻貝である。現在は利用されていないが、1950年代後半ごろまでは、主として子供がおやつ用に採集していたという。とくに饒平名では、ウミニナの殻に棲むヤドカリ類を集めて、炒っておかずにして利用したことが数人から聞かれた。現在は食用とされていないウミニナ類であるが、饒平名ではイボウミニナとウミニナの生息環境の違いを認識していた人もみられた。マガキは、おかずとしての利用のほか、利尿作用をもつ薬としての利用があった。このゾーンの貝類の細かな認識や利用は、屋我よりも稲作中心集落である饒平名の人々に多く認められた。

中潮で周年採集可能な潮間帯中上部（ゾーンⅡ）では、小型の二枚貝の利用が多く、アサリと同じマルスダレガイ科に属するアラスジケマンガイやヤエヤマスダレ、スダレハマグリなどの利用が聞き取りしたすべての人から聞かれた。特に沖縄島の干潟に特有のアラスジケマンガイについては、饒平名では利尿効果がある薬としての利用もあり、多くの人々が戦後の食糧難での重要な食材として語るなど、この生態区の主要な資源としての位置づけがみられた。これらの小型二枚貝類の主な調理方法はみそ汁で、サツマイモと並んで戦中、戦後の重要な食材であったようである。

月に1～2回の大潮のみ利用可能な潮間帯中下部（ゾーンⅢ）では、大型の二枚貝の利用が多い。潮間帯中上部（ゾーンⅡ）と異なるのは、調理方法がみそ汁ではなく、一つ一つ身を取り出すなど、手間をかけて調理するおかずとしての利用であることである。この貝類の中には、毎年旧暦3月に行われた浜降り行事に参加する際の、弁当のお重の具材として利用されたものもある。これらの具材やニッコウガイは海草藻場に多い貝類で、赤土流入後に激減した貝類である。とりわけニッコウガイは、現在の70代世代の母親の世代で活発に採集されたもので、聞き取り対象となった人々のなかには採集方法を忘れていた人も多かった。これはニッコウガイが赤土流出後激減したことに加えて、砂中に50cmほど潜って生息し、その生息場を見つけるには経験がいることなどがあげられる。

最も沖側にあり、春・冬の大潮の最干潮で利用可能な潮間帯下部（ゾーンⅣ）では、ハボウキやウミギクなど、大型の二枚貝がおかずとして利用されてきたが、利用される種数は少なく、近年になるまで利用もそれほど一般的ではなかった。その理由の一つは、このゾーンには方言で「ピシ」と呼ばれるサンゴ起源の岩盤が分布し、その合間の砂にハボウキが埋在することである。砂から突き出るこの二枚貝の殻は鋭利で、素足で踏むと怪我をしてしまう。第二に、ウミギクやハボウキ、ホソスジヒバリなど

大型二枚貝の調理には、貝をゆでて内臓を取り除くといった時間がかかり、この漁場へ歩いていく時間を合わせると採集の割が合わないと思われていたことがある。こうした労働感覚については次節で詳述する。

以上、潮間帯区分ごとに貝類の利用の特徴を述べてきた。羽地内海に面する二つの集落では、潮間帯上部から下部までに生息する様々な貝類が利用され、それらの生息環境として干潟が認識されてきた。特に現在の70歳代の人々にとって、潮間帯上部から中部にかけてのゾーンは主要な漁場であった。ここで特筆したいのは、屋我地島の中心地で、沖積土が比較的富み、水田が営まれてきた饒平名集落で、貝類の利用方法がより多様であったことである。屋我地島の人々は、饒平名集落の人々を「農民」であり「海を知らない」人々と呼ぶことが多いが、実際には貝類の採集活動を通して、干潟に関する細かな知識が形成されてきたことがわかる。

4. 干潟利用の労働観と仕事の変化

前節で述べたように、沿岸集落の70歳以上の人々は干潟やそこに棲む資源生物についての知識をもち、それは赤土流出前後の干潟の変化に関する知識も含んでいる。しかし、この人々の知識が記述されたり、干潟の保全や維持に生かされたりするには、その知識が住民自身によってどのように評価されてきたのかを理解することが重要である。すなわち、知識を生み出してきた干潟での採集活動が、人々の生活における労働配置のなかでいかに位置づけられてきたのか、またその知識を明らかにすることがはばかれるような労働観がどのような地誌的状况をともなってきたのか、を考えることである。その際に留意すべきことは、知識の布置の在り方を、「女性」といったカテゴリーに帰結させるのではなく、陸側と海側両方の環境とのかかわりから理解することである。ここでは、屋我地島の中心集落で、稲作・畑作を生業の中心としてきた饒平名集落と、饒平名よりも田畑が少なく漁業などの農外就業もあった屋我集落とで聞き取りをした計23人のライフヒストリーから、干潟利用に関わる労働観とその背景を検討してみたい。

先に述べたように、屋我地島の中心集落である饒平名では、1950年代半ばまでは低地で米、丘陵地でサツマイモや大豆を栽培することが普通であった。ウェーキヤーと呼ばれる地主のもとで、小作人として働く人も多かった。1930年代から終戦まで、未婚の女性のなかには三重県や大阪府の紡績工場へ出稼ぎに行く人もいた。また、ライフヒストリーを聞きとった23人のなかには、テニアン島やロタ島のサトウキビ農園に出稼ぎに行った家族の子どもも3人いた。1910年生まれの女性(表3:No.1)は、22歳で結婚するまで、母親と一緒によく海にいったことを思い出す。タコやカニ、貝を採ったが、特に潮が満ちてきたときに浜に寄ってくる「わたいがい」(タイワンガザミ)

表 3 羽地内海沿岸集落の生活と干潟の採集活動

Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.

Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.

Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.

Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.

* 生誕地と居住地が異なる場合はカッコ内に生誕地を示した

が印象に残っている。結婚して子育てが始まると海から遠のいたが、子どもが成長してからは、家族で夜、電灯を照らして海を歩いたという。1917年生まれ的女性(No.2)も、赤土流出前に、海草が覆う干潟でタイワンガザミをとったことを覚えている。また、このころ海草藻場に多く生息したニッコウガイも採っていた。しかし、岸からやや離れたゾーンに棲むホソスジヒバリなどは、かつては人気がなく、3月の大潮のときにやや沖に出て採るのは、リュウキュウサルボウやウミギクなどの大型二枚貝で、小さな貝は調理が面倒でほとんど利用することはなかったという。1919年生まれ的女性(No.3)は、母親がニッコウガイを採り、夜は家族で松明を持って干潟でエビ類や潮だまりにいるキス、ナマコを採ったが、結婚してからは農業が忙しくなり、海に行かなくなったという。

上記3人の女性は両親や、自分が子どものころに干潟で食料を採ったことを語っていたが、結婚後は子育てや農業労働の主力となるなかで、海での採集活動は周辺化された。一方、1920年以降に生まれた人たちのなかには、子どものころから干潟での採集活動を禁止された場合が多く聞かれた。このころは、世界恐慌を背景に糖価が暴落し、沖縄全島で飢餓が発生した時期である。屋我地島では、救飢食であるソテツを口にしたという話は聞かれなかったが、屋我地島を含む羽地地区一帯で、海外への出稼ぎが急増した背景には、農村の困窮がある。

この時期子供時代を過ごした人のなかには、干潟での採集活動を戒められた記憶を持つ人も多い。海に行くと、「しにぬがー」(怠け者)と呼ばれた、というのは屋我地島だけではなく、羽地地区一帯で、よく耳にすることである。「実家は農家で昼間は忙しく、夜潮が引く時だけ採集にいった」(No.3)「母親は海が好きで畑の行き帰りに浜を歩いてタコなどを採ったが、これをカゴに入れた飼葉の下に隠して家に持って帰った」(No.13)などの言葉から、干潟での採集活動が正統なものではなく、隠れてこっそりとなされるものであったことがわかる。「あかいなー(ニッコウガイ)を男が採ると、チンチンが腫れると言われた」(No.12)との言葉に示されるように、貝類採集に対する禁忌は、とくに男子に対して強かったようである。これらの状況の背景

の一つに、田畑での仕事が家族の主生業であり、恐慌や飢饉のなかでその位置づけが強化されたことが考えられる。特に、田畑の仕事が主生業である饒平名集落で海での活動への忌避が強いといわれていることから、このことは重要である。しかしもう一方で注目すべきは、干潟の生物利用、特に羽地内海のような、多種少量の貝類が生息する場での採集・調理のプロセスの特徴である。海での活動により積極的といわれた屋我の女性でも、「子どもの頃は、海にいても父母は喜ばない。(採集による収穫は)あれちよっぴり、これちよっぴりさ。(調理が)めんどくさい。」(No.19)と述べるように、羽地干潟では貝類だけで170種類以上の貝類が棲息しており、多くの種類の貝類が食用として認識されている。特に岸寄りの干潟で採集される貝類は小さく、同種の貝類を多く集めようとすると慣れない子どもには時間がかかる。一方、現在腰まで浸かって貝類を採集する沖側の干潟(ゾーンⅣ)の利用に関しては、ピシ(サンゴ質の岩盤からなる礁)を歩くと足をけがする、といった危険のほか、採集した貝類の処理が大変なので、かつては採る人がいなかった、といったように、加工の手間を挙げた人もいた。例えば現在盛んに採集されているハボウキは、その大きな貝柱が食用とされる貝であるが、岩に体を固定するための繊維状の足糸という組織や外套膜などの組織を取り除く必要がある。このように手間がかかる貝類よりも、そのまま汁になる小型の二枚貝や、カニ類、タコなどがおかずに向いていた。ただ、一年に一回最も潮が引く旧暦3月3日の「浜降り」の日には、女性は大手を振って海に向かい、ピシよりもやや岸に近いゾーンに分布するリュウキュウザルガイなどを採集できた。それ以外の日常はこのように漁場に限られるなかで、子どもはむしろ、親たちの眼を気にしつつ、いつでも干潮時に近づける岸近い干潟でウミニナなどの小さな巻貝を採集し、おやつのようにして食べるが多かった。特に稲作・畑作を中心的生業とする饒平名や、内海の対岸に位置する呉我集落でその傾向があり、饒平名では茹でたのち肉部分を吸い取って食べるほか、空いた貝殻にすみつくヤドカリを集めて、炒っておかずにしたという。塩田を所有していた女性が、「塩田でお金があり、余裕が少しあったから海にも行けた。饒平名の人には海に行くのを嫌がった」(No.16)と述べるように、農業中心の集落である饒平名では沖側の干潟に行くことは難しく、岸に近い、潮間帯上部の利用が中心だったと考えられる。

こうして子ども時代に、干潟での採集活動を半ば禁じられ、活動にかかわる知識も周辺化されてきたが、そうした干潟の位置づけがのちに变化した。すなわち、海に出て貝類を採集することがおおびらにできるようになったのである。集落の人々によれば、その一つの理由は、サトウキビやパイン畑を次世代に譲渡したので時間ができた、というものである。これは、採集の時間だけではなく、調理の時間も含み、とくに手間がかかる大型の貝類の調理の時間ができたことは大きな変化であった。「ムール貝」に似たホソスジヒバリや、タイラギに似て貝柱を食用とするハボウキなどの利

用はこれにより活発になった。第二に、これまで自家消費専用だったいくつかの貝類が売買されるようになったことである。みそ汁の具としての小型の二枚貝は、戦後すぐに市内の市場で取引されるようになり、ホソスジヒバリも本島中南部から仲買人が買い付けに来るようになった。屋我の人々は、東シナ海側のサンゴ礁藻場で採集される海人草やナマコ類をすでに戦前から販売した経験をもっていたために、干潟の貝類の販売に乗り出すのも早かったが、のちに饒平名にも販売する人がみられるようになった。このことで、干潟での採集が「仕事」としても認識されるようになったのである。このホソスジヒバリは、「赤土流出後に増えた」とする人も多く、その真偽は明らかでないにしても、新たな採集対象として認識されるようになったことを示していると考えられる。ただし、かつて岸側の干潟で小さな貝類を採集していた人には、「赤土で海が泥だらけになったので行かなくなった」とする人もいるので、同じ集団の利用が活発化したかどうかはわからない。ただ、戦後の貝類の流通変化や、加齢にともなう世帯内での女性労働の位置づけの変化が、沖側の利用を活発化した大きな要因であることは明らかである。現在、春の大潮に潮間帯下部で海水に腰まで浸かり、ウミギクなどを採集している高齢女性らの姿は、田畑を子らに譲り干潟に行く余裕ができた1990年以降に激増したものである。畑を子供に譲り、自らは家庭菜園での野菜づくりを毎日の仕事とする屋我のある女性は、現在では「畑も上手、海も上手」な女性として村人に語られている。その女性とともに海に出かける別の女性が、「本当は海は嫌いだけど、怠け者といわれたくないから行くんだよ」(No.20)とボヤクのを聞いたとき、まるで「怠け者」の対象が逆転してしまったような感覚を覚えて筆者は驚いた。彼女らは、貝類が大量に採れた時には販売することもあるが、多くの場合は、家庭菜園で採れる野菜同様、名護市内や那覇市などに住む子供らや親せきに分け与えることを主な「仕事」として採集に出かけるのである。ここに、干潟の採集活動による知識の位置づけを、世帯内や地域における労働の変化との関係のもとに捉える必要が示されている。

5. 自然知識の動態と参加型保全

本稿でとりあげた批判的な開発論が示すように、住民参加型の開発あるいは保全は、民主的な手法となりうる魅力的な枠組みである。しかし、それに伴って考えるべき問題については、とくに日本においては、議論がすすんでいるとは言い難い。沖縄島では護岸工事など、沿岸開発の際に護岸のタイプを施工者側がいくつか準備し、地域の小中学校の生徒に選ばせるという「住民参加」がみられるが、このような開発側のシナリオに沿った場当たりの住民参加がすすめられている状況なのである。住民参加型の保全の課題は、地域を超えて議論ができる一つの領域ととらえるべきであろう。

自然再生への住民参加に期待される一つの効果に、生活を通じた自然とのかかわりによって形成された、自然の知識を反映させることが挙げられる。しかし、このような「ローカルな知識」を反映させるには、いくつかの問題を考える必要がある。第一に、「地域住民の知識」の多様性をいかにとらえるか、という問題であり、第二に、住民に蓄積されてきた「知識」は果たして、すべて同様に公の知識として提示しうるのかという問題である。

地域住民の知識の多様性は、従来の開発論ではジェンダーやエスニック集団など、周辺化されやすいとされる社会集団や属性によって語られることが多い。しかし、こうした捉え方は一方で、第三世界や農山漁村の女性や先住民を、従属的な集団として表象する側面も批判されてきた。筆者は、沿岸資源利用の調査のステップとして、「女性」などの属性に焦点を当てることは一つの有効な手段であると考えるが、集落や年代などによる差異を踏まえるというステップも同時に必要だと考える。とりわけ戦後に大きく沿岸環境が改変された地域では、集落や小字レベルの小さな社会空間単位や、年代を通して、資源利用の時空間変化を考えることは有効である。

沖縄島に一般に見られるように羽地内海でも、漁協による排他的な資源の利用は実態として確立しているわけではない。沿岸住民や都市住民も食料採集あるいは余暇活動の一つとして、沿岸資源を活発に利用している。これら異なる資源利用を通して、沿岸の環境認識が重層的に形成されている。商業漁業は年間を通じて、羽地内海を囲む広い漁場で操業し、夏季の潜水漁やカニ籠、冬季の刺し網や小型定置網は主に内海を漁場としている。内海の漁業では、タイワンガザミやドロクイ、キスなど干潟を含む内海の砂泥底を生息場とする資源を利用しており、漁業者もこれらの生物生態や生息場の状況を認識している。内海の汽水環境を形成する河川の変化や、赤土流入による内湾の土砂堆積など、羽地内海全体の環境変化は、特にこの商業漁業者によって認識されている。一方、干潟の貝類資源については、漁業協同組合員による採集は潮下帯や岸から離れた砂地などに集中し、集落につながる砂浜や干潟はその住民のものと認識されている。集落に属する干潟の領域の境界は緩やかなものだが、少なくとも60歳代以上の人々はとなりの集落の干潟で採集することはほとんどない。干潟の環境変化は沿岸集落の人々によって認識されており、特に赤土流出前の藻場に特徴的な貝類の生息状況は、1970年までに干潟で貝類を採集してきた人々のなかに生態知として蓄積しているといえる。

しかし、こうした知識は、沿岸集落の人々に一様に共有されているわけではない。羽地内海の干潟に住む貝類には、集落ごとに異なる方名がつけられたり、異なる利用方法があったりするなど、空間的な知識の差異が認められる。干潟の利用で特に留意すべきは、漁業を生業とする集落ほどその知識が豊富とは限らない、ということである。羽地・屋我地地区において砂泥からなる干潟は、かつて水田として利用された沖

積低地に連続して広がる沿岸地形であり、この干潟を利用する人々は、農業を主な生業として暮らしてきた人々である。屋我地島で最も農地が広い饒平名は、他の集落の人々からは「海を知らない」と言われることが多い。確かに干潟の最も沖側の貝類の利用は活発ではなかったが、遊びや自給的な利用を通して潮間帯上部の貝類を利用し、かつて藻場に見られた生物相を細かに認識していた。一方、農地が少なく、「海を知っている」人が多いといわれる屋我には、河口に連続する泥干潟はなく、人々は外洋に面したサンゴ砂質干潟や、沖に近い干潟の利用によって販売に十分な量の貝類や藻類を採集する一方で、潮間帯上部の利用はほとんどなされてこなかったといえる。農地整備による赤土の堆積に最も影響を受けた潮間帯上部の生態に対する知識は、農業が主な生業とされる集落の人々の生活と密接に関連しており、それは地域の人々に見過ごされがちな知識なのである。

農業集落の人々がもつ干潟の知識は、近隣集落において正統なものとされていないだけでなく、干潟に関わる人々自身によっても正統化されてこなかった知識である。この「非＝正統」の知識の状況は、次の3つの点から理解することができよう。第一に、その知識が沖積低地の沿岸という場所において、稲作-畑作労働に対する干潟の採集活動という対比をもっていたという点である。これは従来の開発論における、公的／私的、あるいはフォーマル／インフォーマルという労働の二項対立的な構造に似ているが、問われるのはそのような相似性ではなく、このような構造がみられる場所の生態的な位置づけである。場所への視点によって、地域によって多様な知識のあり方を動的に考えることが重要なのである。たとえば沖縄島で数少ない稲作地域であった羽地-屋我地地区では、地形に沿って細かく配置された水田が、同時に沿岸への土砂流出を受け止める受け皿にもなっていた。人々は水田でタニシを採集するのと同じ楽しみをもって、干潟で貝類を採集してきた。一方、出稼ぎを増加させた背景ともいわれる共有田の廃止や人口増加のなかで、自給用の畑作労働はより強く求められ、干潟での採集活動は「楽しい」からこそ公に労働とされない隠れた活動とされてきたと考えることもできる。

第二に、干潟資源の採集にかかる労働、そして知識を埋め込む生物の役割である。羽地内海沿岸では、たしかに陸域の活動との対比のなかで採集活動は「遊び」とされてきたのだが、人々に採集活動を続けさせてきたのはその対象となる生物である。干潟の貝の収穫について「あれちよっぴり、これちよっぴりさ」との表現に示されるように、羽地内海の干潟の二枚貝には種類が多く、調理もそれぞれ異なる時間と異なる処理が必要である。この資源の少量多様性は、熱帯亜熱帯の水産資源にある程度共通しているが、それは潮間帯の底生生物においてとりわけ顕著である。採集する人々のなかには、砂に潜った貝類が驚いて吹き上げる潮の様子や、餌を求めて動かす水管の軌跡によって、採集時に貝類を見分ける人々もいるが、それでも干潮時の限られた時

間に得られる収穫は多種になりやすい。しかし、次から次へと得られる様々な収穫物は、採集者にとって大きな楽しみであるため、手間がかかると思いつつも採集してしまうのである。このように労働や知識を位置づける生物の働きは、その分配や商品化の過程によって変化する。干潟の貝類は、沿岸にすむ多くの人々にとって商品化の対象ではなかったが、那覇市からやってくる仲買人にとっては重要な商品となった。沖縄県の干潟が減少するなかで、羽地内海産の「地物」貝類は相対的に価値が上がっているようにも見える。市場価値の上昇は、その採集を「正統な」労働とするに足る評価をもたらす場合もみられる。しかし、このような労働の「正統化」は、第三の視点、ライフコースにおける労働観の移行と合わせて理解する必要がある。羽地内海沿岸集落の人々、とりわけ過去に「マクリ」といった薬用海藻や「ハネジナマコ」など輸出用のイロコ生産の経験がある人々のなかには、近年になって干潟での採集活動を「足が痛くてもやらなくてはならない」仕事として考える人がみられるようになった。世帯の主要な労働力として働いた20代～40代のころには遊びであった貝類採集は、子どもが独立したり農地を手放したりした現在では主要な「仕事」となっているのである。加齢にともなうこうした労働の変化は、ある集団内でも多様ではあるが、ライフコース上ほぼ確実に起こる事象であり、採集活動とこれに関わる知識の埋め込みの状況を可変的にしているといつてよいであろう。

最後に、こうして干潟の資源利用と「地域住民の知識」を動的にとらえることの意義を、自然再生事業における住民参加との関係からいくつか挙げておきたい。Mosse (1994) が指摘したように、本事例地域においても参加型開発プロジェクトにおける知識の収集は、「公的な」行事としておこなわれ、「私的な」自家消費目的の採集活動を通じた知識は除外されがちである。しかし、採集活動が「私的」かどうかは固定的な概念ではなく、それが分配されたり商品化されたりする空間に影響を受けて変化する。広い空間に流通する商品化には、羽地内海におけるナマコ資源利用のように現在では忘れられているものもあり、こうした歴史的事実を掘り起こし地域で共有することは「私的」「公的」の境界を再考するうえで有効だと思われる。さらに、現在の生き物の価値を生物学的固有性や商品化の側面から再評価することも、埋め込まれた知識を掘り起こすために有用となりうるだろう。ただし知識の状況は、採集者を取り巻く家庭や集落、県域など様々なスケールの空間と歴史、数えきれないほどの潮の干満と活動の繰り返しを通じて形成されてきたものである。そのようにして形成された「私的な」状況を理解するならば、「公的な行事」のあり方を考えることの重要性がより明確になるように思われる。「住民参加」を形骸化した単なる「手続き」としないように批判的な眼を向けつつ、教育研究機関や行政が協力して、干潟との関わりの場に埋め込まれた知識を掘り起こす。いかにも手間のかかる作業ではあるが、そうした作業を通じて「地域住民の知識」の多様性を確認することなしに多くの開発・

保全がすすめられることに、改めて問題意識をもつことが必要とされているのではないだろうか。

謝 辞

本研究をすすめるにあたって日ごろからお世話になっている、坂下宙子氏・坂下光洋氏はじめ屋我地島の皆さん、渡久地豊氏はじめ呉我の皆さん、名桜大学の中村誠司氏、琉球大学風樹館の名和純氏に感謝します。なお、調査の一部はトヨタ財団研究助成（「琉球列島の干潟における潟生業についての研究」代表：長田英巳）と科研費（19720223）の助成を受けた。

注

- 1) Cooke らの批判に対する応答という形で、2004年にヒッキイとモハンによる論集が編まれ、真崎らによる翻訳が日本でも出版された（ヒッキイ・モハン2008）。本書では、参加型開発を「専制」と切り捨てる安易な批判に警告をならし、参加を社会変革の契機ととらえる論考が示されており重要であるが、本稿の議論の範囲を超えるため別稿であらためて検討したい。
- 2) 羽地大川の改修は近世から数回にわたっておこなわれ、特に1735年に始まる蔡温の指揮による改修は『羽地大川修補日記』（名護市教育委員会文化課市史編さん係編2003）に詳細に記録されている。ただし現在のように沖積地縁辺の仲尾次へ付け替えられたのは大正期になってからである。なお、羽地大川上流には2005年にダムが完成し、内海に流入する水量も大きく変化した。
- 3) 羽地大川上流域の山村生活については、『羽地大川——山の生活誌——』（羽地大川一山の生活誌調査編集委員会編1996）を参照のこと。
- 4) 『屋我地の歴史をあるく』（名護市史編さん室編1991）参照。
- 5) 『屋我地土地改良事業完工記念誌』（屋我地土地改良完成記念碑建立委員会編1987）による。
- 6) 羽地内海の貝類、野鳥、水産資源については『羽地内海うむしるむん図鑑』（羽地内海を守り育む会編2008）、特に貝類相の特徴については名和（2001a; 2001b）を参照のこと。
- 7) とりわけ1990年以降、沖縄島の多くの干潟や藻場が埋め立てや護岸により消失するなかで、羽地内海の生物相の希少性が高くなっている。貝類では30種以上が絶滅危惧種（Ⅰ・Ⅱ類）となっており（『平成17年レッドデータおきなわ』）、羽地内海は2001年に環境省による「日本の重要湿地500」に選定されている。

文 献

- Agrawal, A. and C. C. Gibson
1999 Enchantment and disenchantment: the role of community in natural resource conservation. *World Development* 27 (4): 629–649.
- Agrawal, A. and K. Gupta
2005 Decentralization and Participation: The Governance of Common Pool Resources in Nepal's

- Terai. *World Development* 33(7): 1101–1114.
- Berkes, F. (ed.)
 1989 *Common property resources: Ecology and community-based sustainable development*
 London: Belhaven Press.
- Cleaver, F.
 1999 Paradoxes of participation: questioning participatory approaches to development. *Journal of International Development* 11: 597–612.
- Cooke, B. and U. Kothari (eds.)
 2001 *Participation: the New Tyranny?* London: Zed Books.
- Cornwall, A.
 1998 Gender, participation and the politics of difference. In I. Guijt and M. K. Shah (eds.) *The Myth of Community: Gender issues in participatory development*, pp. 46–57. London: ITDG Publishing.
- Davis, A. and C. Baily
 1996 Common in custom, uncommon in advantage: common property, local elites, and alternative approaches to fisheries management. *Society & Natural Resources* 9: 251–265.
- Guijt, I. and M. K. Shah
 1998 Waking up to power, conflict and process. In I. Guijt and M. K. Shah (eds.) *The Myth of Community: Gender issues in participatory development*, pp. 1–24. London: ITDG Publishing.
- Hildyard, N., P. Hegde, P. Wolvekamp and S. Reddy
 2001 Pluralism, participation and power: joint forest management in India. In B. Cooke and U. Kothari (eds.) *Participation: the New Tyranny?*, pp. 56–71. London: Zed Books.
- McCay, B. J. and J. M. Acheson (eds.)
 1987 *The question of the commons: the culture and ecology of communal resources*. Tucson: The University of Arizona Press.
- McKinnon, K.
 2006 An orthodoxy of the local: post-colonialism, participation and professionalism in northern Thailand. *The Geographical Journal* 172(1): 22–34.
- Mohan, G. and K. Stokke
 2000 Participatory development and empowerment: the dangers of localism. *Third World Quarterly* 21(2): 247–268.
- Mosse, D.
 1994 Authority, Gender and Knowledge: Theoretical Reflections on the Practice of Participatory Rural Appraisal. *Development and Change* 25(3): 497–525.
 2001 ‘People’s knowledge’, Participation and Patronage: Operations and Representations in Rural Development. In B. Cooke and U. Kothari (eds.) *Participation: the New Tyranny?*, pp. 16–35. London: Zed Books.
- Thompson, J.
 1995 Participatory approaches in government bureaucracies: Facilitating the process of institutional change. *World Development* 23(9): 1521–1554.
- Twyman, C.
 2000 Participatory conservation? Community-based natural resource management in Botswana. *The Geographical Journal* 166(4): 323–335.

池口明子

2005 「沖縄島羽地内海における漁船漁業の資源利用」『地域研究』1: 77-90。

石川友紀

1997 『日本移民の地理学的研究—沖縄・広島・山口—』沖縄：榕樹書林。

小川 徹

1975 「羽地村真喜屋の社会誌学的研究—沖縄本島の先進的水田農村の場合—」東京都立大学南西諸島研究委員会編『沖縄の社会と宗教 第3版』pp.91-122。

坂下宙子

2001 「海Ⅱ」名護市史編さん委員会編『名護市史本編9 民俗Ⅱ 自然の文化誌』pp.115-171, 沖縄：名護市編さん委員会。

チェンバース, ロバート

1995 『第三世界の農村開発—貧困の解決—私たちにできること—』穂積智夫・甲斐田智子監訳, 東京：明石書店。

ヒッキイ, サミュエル・モハン, ジャイルズ編著

2008 『変容する参加型開発—「専制」を超えて—』真崎克彦監訳, 東京：明石書店。

名護市教育委員会文化課市史編さん係編

1991 『屋我地の歴史をあぐる』沖縄：名護市役所。

2003 『羽地大川修補日記』沖縄：名護市役所。

名護博物館

2000 『塩—屋我地マースを見直す—』沖縄：名護博物館。

名和 純

2001a 「沖縄島における干潟貝類の現状」『日本ベントス学会誌』56: 32。

2001b 「琉球列島における内湾干潟の貝類相」『WWF Japan science report』4: 1-44。

羽地大川一山の生活誌調査編集委員会編

1996 『羽地大川—山の生活誌—』沖縄：名護市役所。

羽地内海を守り育む会編

2008 『羽地内海うむしるむん図鑑—羽地内海の多様な生きものと人々の暮らし』沖縄：羽地内海の自然を守り育む会事務局。

屋我地土地改良完成記念碑建立委員会

1987 『屋我地土地改良事業完工記念誌』。